

回想

2025. 3. 21

もうずいぶんと経ってしまったが、南会津の中学校に勤務したことがある。新任教頭として赴任した。その学校は、閉校となってしまい、今はない。

毎週、金曜日になると、福島へと向かうことになる。夏場は、夕方18時30分まで部活動をやっていた。そこからが早かった。先生方が、さっと帰っていく。なぜか。私を福島に帰すためである。少しでも私を早く帰してあげようと、みんな退勤していく。

2011年3月11日には、こんなこともあった。南会津でもかなり揺れた。尋常ではなかった。学校の近くの公民館で、卒業を祝う会を、生徒、保護者、教員で催していた。会もまもなく終わろうかという14時46分のことだった。一気に揺れた。誰に言われるまでもなく、みんなで室外に飛び出した。それほど揺れだった。今まで経験したことがないような揺れだった。身の危険を感じた。

生徒と保護者の安全を確認し、すぐに学校に戻った。学校では、留守番の用務員の女性が、職員室のテレビが倒れないようにと押さえてくれていた。おかげで、テレビを見ることができ、何が起きたのかが徐々にわかってきた。学校の被害状況を確認した。当分の間、学校に居ることになると覚悟を決めた。

すると、先生方が「教頭先生、早く帰ってください」と口々に言うではないか。確かに、我が家族のことがわからない。安否が確認できない。家人も教員である。我が子のことが心配とはいえ、教員としての仕事、学校の先生としてやるべきことを優先させているはずである。

こんなとき、南会津は遠かった。帰るとはいつても、3時間近くかかる。どのルートに戻るかもむずかしかった。どこを行っても山道を通ることになる。土砂崩れや道路の崩壊があるかもしれない。東北道が通れるかもわからない。

思案の末に、最短ルートに行くことに決めた。案の定、山道では道路が崩落し、片側分しか通れない場所もあった。そんなことはおかまいなしに、強行突破を試みた。後で知ったことだが、私が通り抜けた後、しばらくして、その道は通行止めとなった。

どうにかこうにか、山を越え、須賀川あたりまでたどり着いた。その辺一帯が水浸しだった。勝手に液化現象かと思った。これも後で知ったことだが、藤沼湖が氾濫していた。国道4号線を一路北へと向かった。あんなに暗い4号線は初めてだった。明かりがない。二本松まで来た。コンビニに入った。すでに商品がなかった。

ようやく福島盆地が見えてきた。いや、見えない。真っ暗だった。自宅が近づいてきた。やはり明かりがない。道路が陥没し、車が落ちている。家に着いた。真っ暗だった。家族はどこにいるのか。どこかに避難したのか。家人の車がかった。中をのぞいてみた。毛布にくるまった3人を発見した。ようやく家族の無事を確認できた。14年経っても、まるで昨日のことのよう蘇ってくる。